

第二篇 作戦

一

孫子はいう。これは「用兵の原則」というべきものであるが、戦車千両、運搬車千台、兵士十万人を敵国内に侵攻させ、そのために千里（約六百キロメートル）先まで食糧を運送するとすれば、国内や戦地での出費、使者や間諜（＝スパイ）の往来、膠（にかわ）や漆（うるし）といった兵具の材料、戦車や兵具の補充などで、一日に千金を費やすことになる。この条件を満たしてはじめて十万の軍隊を戦わせることができる。しかし、その戦いに勝つとしても、野戦が長引くようでは兵器を損傷させ、兵士の鋭気をくじくことになり、ましてや城を攻め落とすのに月日をかければ、戦力も尽きてしまう。だからといって、ただ敵と対陣させ、長いあいだ軍隊を風雨にさらしておけば、やがて国の経費が不足してくる。

兵器が損耗し、士気が低下し、戦力も尽き、国庫も窮乏したということになれば、その疲弊につけこんで隣国が侵攻し、あるいは諸侯がそむいて挙兵するようになる。このようになってしまった後では、どんなに智謀がある人でも、どう善処することもできない。

したがって、兵を用いるには、少々粗雑であっても簡明にしてすばやく討つほうが良いのであって、巧妙に手間をかけながらも、機に応

じられずに長びくのを良いとするような例など未だにない。そもそも長期戦が国家に利益をもたらしたなどということをも、これまで聞いたこともない。このように、兵を用いることに伴う損失をよく理解していない者には、兵を用いることによつて得られる利益を十分に知ることができないのである。

二

上手に兵を用いる将軍は、速やかに戦いを終えるので、民衆の課役を繰り返して割当てず、食糧を三度も国内から前線に運ぶようなこともない。しかも、軍用品のほとんどは自国で調達するが、大きな輸送力を必要とする食糧だけは先んじて敵地で調達しておくので、兵糧が不足することもない。

国が軍隊を遠征させることで貧窮するのは、遠くへ食糧を運ぶからである。食糧を遠くまで運べば、その輸送に使役される民衆はことごとく貧しくなる。なぜならば軍隊の近くに集まる商売人が足もとをみて値段を高くして物を売り、それを買うしかない民衆は蓄財が底をつくからである。民衆の蓄えが無くなれば村ごとに課せられる牛馬の供出にも応じられなくなる。しかも戦場では物価高で軍資金が枯渇して軍隊の士気も落ち、国内の家々では家業を失うことで、民衆はその生活費の七割を削減しなければやっていけなくなる。国費も、長距離の食糧輸送に伴って壊れた戦車や疲れ果てた馬、甲冑、矢、大弓や槍、

楯、蔽櫓(おおだて)、運搬車とそれを引く牛などの損耗を補充すること、その六割が失われる。それゆえ、優れた将軍は、敵地で食糧を手に入れるように務める。敵地で調達した一鐘(しよう)を食べるのは、自国から運んでくる二〇鐘に相当し、敵地で調達する牛馬の糧一石は、自国から運んでくる二〇石に相当するのである。

三

敵兵を殺すのは、兵士の心を刺激し、励ますことによる。勇み進んで敵の軍需品を奪い取るのは、兵士への賞功を厚くし、功績に応じた財宝を与えるからである。例えば、戦車どうしの戦闘で敵戦車十乗以上を捕獲したならば、ただちに一番手柄のあった者を賞し、その旗じるしを新しいものに換えることで武勇功名を知らしめる。

この際、鹵獲(ろかく)した戦車は味方のものに交えてこれらを用い、降参した敵兵をも厚くもてなし、味方にして用いる。これを、「敵に勝って強さを増す」というのである。

四

こうしたことから、戦争は勝つことが重要であるが、だらだらと長引かせるのは好ましくない。それゆえ、兵法を十分に知っている大将だけが万民の命をつかさどり、国家を安らかにするか危うくするかを決することができるのである。